

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520147

研究課題名(和文) 地方都市の復興事業におけるジャズ音楽の活用 - 日米地域文化の比較研究

研究課題名(英文) The Use of Jazz Music in Regional Urban Revitalization Projects: A Comparative Study of Japanese and American Regional Cultures

研究代表者

モラスキー マイク (Molasky, Michael)

早稲田大学・国際教養学術院・教授

研究者番号：80585406

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究で実施した日米両国の中小都市での現地調査から明らかとなった課題は、以下のように分類できる。(1)日米間におけるジャズ音楽の文化的位置づけの差異、(2)米国内の地域間によるジャズ音楽の文化的重要性の差異、(3)日本のジャズ文化における主要都市(東京・横浜、京都・大阪・神戸)と地方都市との間にみられるジャズの文化的位置づけ及び意義の差異、(4)日本国内の地方都市間(地域間)にみられるジャズ音楽の文化的存在の差異、(5)地方都市の復興事業における音楽の一時的な活用(恒例のイベント等) vs. 音楽を提供する個人経営のライブスポットや飲食店など永続的・営利的な空間が生み出す効果の差異。

研究成果の概要(英文)：This research project entailed fieldwork conducted in small and mid-sized cities in both Japan and the United States. The research results primarily addressed the following issues: (1) differences in the cultural status of jazz music between Japan and the United States, (2) differences in the cultural significance of jazz among cities and regions within the United States, (3) differences between the cultural status and significance of jazz music in major Japanese cities with a prominent jazz culture (Tokyo-Yokohama and Kyoto-Osaka-Kobe) and smaller or more remote regional cities, (4) differences in the cultural significance of jazz among Japan's regional communities, (5) assessing and comparing the impact of (government-supported) musical events as part of local revitalization projects as opposed to the impact of privately-run commercial spaces (pubs, music clubs, etc.) that provide live or recorded music on an ongoing basis in the same communities.

研究分野：日本文化研究、ジャズ研究

キーワード：ジャズ 地域文化 復興と芸術

1. 研究開始当初の背景

研究代表者はかつて全国のジャズ喫茶を対象に調査したことがあり、その成果を単著『ジャズ喫茶論』(筑摩書房、2010年)にまとめた。本研究では、日米両国の地方都市まで調査対象地を拡大し、国内の地方都市(特に東日本大震災の被災地)に重点をおきながら、中小都市の復興策におけるジャズ音楽の活用に着目した。

2. 研究の目的

本研究は、1960年以降の日米両国の地方都市におけるジャズ音楽の文化的位置づけの変容を比較考察しながら、各地の文化活性化及び経済復興において、ジャズ関連のイベントや地元のジャズスポットが果たした役割とその効果を明らかにすることを主目的とした。特に両国で自然災害を被った町の被災後の復興事業において、なぜジャズが度々復興手段として選ばれたかという点に着目した。この問いを究明するに当たって、各地のジャズ受容の歴史を調査し、地域間の相違点を十分に検証しながら、地方都市復興策におけるジャズという芸術の一形態の可能性と限界を示すことが本研究の主要な目的である。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するために、以下の方法を中心とした：

- (1) 国内各地での聞き取り調査 地方の現地調査では 地元のジャズ関係者へのインタビュー、 地方の戦後史研究者と交流を行い、当地独自の歴史的・経済的・文化的条件が地元のジャズ受容にどのような影響を及ぼしてきたか、他地域と比較しながら究明した。
- (2) 国内の地方都市での資料収集・読解・整理 調査先のジャズ史に関連する資料、 地元戦後史に関連する史料を中心に収集し、後に読解・整理作業に専念した。
- (3) 米国での短期現地調査 米国調査では ジャズ研究資料館の閲覧、 地方都市のジャズ史に関する先行研究の収集、 地方のジャズ史研究者との交流を中心に行った。

4. 研究成果

本研究で実施した日米両国の中小都市での現地調査から明らかとなった課題は、以下のよう分類できる。

- (1) 日米間におけるジャズ音楽の文化的位置づけの差異
- (2) 米国内の地域間によるジャズ音楽の文化的重要性の差異
- (3) 日本のジャズ文化における主要都市(東京・横浜、京都・大阪・神戸)と地方都市との間にみられるジャズの文化的位置づけ及び意義の差異
- (4) 日本国内の地方都市間(地域間)にみられるジャズ音楽の文化的存在の差異
- (5) 地方都市の復興事業における音楽の一時的な活用(恒例のイベント等) vs. 音楽を提供する個人経営のライブスポットや飲食店など永続的・営利的な空間が生み出す効果の差異

以下、この五点に関わる主たる考察内容を列挙する。

- (1) 日米間におけるジャズ音楽の文化的位置づけの差異 同じ中小規模の都市を事例に比較考察しても、日米におけるジャズ音楽の文化的位置づけには大きな相違点がある。何よりも、日本においてジャズに対する認識はあくまでも「外来音楽」であるのに対し、アメリカにおいては「自文化」つまり「我が国」(ニューオーリンズなどの場合は「我が町」)が生み出した文化として称揚され、「ローカルプライド」と結び付けられる傾向がある。この意識の違いは、両国の町興しおよび観光事業におけるジャズ音楽の活用を論じる際に、重要な手掛かりとなる。

たとえば、「ジャズの源泉」と自称するニューオーリンズでは、ジャズ専門の博物館や資料館などが数軒あり、町興し及び観光客誘致作戦の一端としてジャズフェスを含むイベントがいくつも開催されるが、その一連の活動の背景にはニューオーリンズ=ジャズという図式（そして営業戦略）が見受けられる。セントルイスでは、毎月回数ニューヨークなどから有名なミュージシャンを呼び、ジャズコンサートを開催する非営利事業があるが、その組織の使命のひとつは地元の学校教育に貢献することにあり、呼ばれるミュージシャンたちにコンサートとは別に、市内の公立高校（とくにアフリカンアメリカンの生徒の多い学校）でジャズのワークショップを実施することが条件になる場合がある。そのような活動にも、ジャズ音楽というのは継承されるべき「地元文化」であるという発想が見受けられる。

(2) 米国内の地域間によるジャズ音楽の文化的重要性の差異

本研究のため、米国ではミシシッピー川沿岸の四都市を調査対象とした

ニューオーリンズ、メンフィス、セントルイス、ミネアポリス（隣接するセントポール市を含む）十九世紀末期から一九三〇年代頃まで、ミシシッピー川を上下する蒸気船の上でラグタイム及びジャズの演奏が行われ、その生演奏によってジャズという新しい音楽がニューオーリンズから広がっていったことは周知の通りである。当時、各地で独自の「サウ

ンド」強いていえば「ジャズ方言」が生じることもあったが、レコードやラジオなどの新規音源メディアの普及によりそのような地域特有のサウンドが希薄になっていった。とはいえ、現在でもこの四都市のジャズ状況を比較すると明らかな違いが浮き彫りになる。上述の通り、ニューオーリンズは「ジャズの本場」という自負が強く、ジャズ専用の施設が散在しており、多様なイベントも開催される。ところがメンフィスは何人もの優れたジャズミュージシャンを輩出しているにもかかわらず、町としてはジャズよりもブルースやロカビリー（エルビス・プレスリーの最初のレコードはメンフィスで録音された）そしてソウルミュージックで知られており、それぞれの音楽博物館および観光客向けの施設とイベントがあるのに、ジャズの影が相当に薄いといえる。セントルイスには上述の非営利事業の活動とは別に、夏にはミシシッピー川沿岸に留まる蒸気船上でディキシーランドジャズが演奏されるが、その背後にはこれを町の風物詩として観光客にアピールする戦略がみられる。ミネアポリス・セントポールの場合、数年間にわたり、地元のジャズミュージシャン達とパリ在住のミュージシャン達との交流を目指すイベントが、各地の音楽業界関係者および音楽イベントを提供する飲食店の協力で実行されたが、赤字が続いたため断念してしまった。要約すると、アメリカの中小都市におけるジャズ音楽の位置づけ、そ

して観光誘致を含む復興事業におけるジャズの活用は千差万別であるが、日本との大きな違いはジャズが地元の歴史と文化のなかの重要な要素であるという認識だといえる。

(3) 国内の主要都市と地方都市におけるジャズの位置づけ及び意義の差異

とりわけ一九六〇年代一九七〇年代では、東京のジャズ喫茶やライブハウスは最新のジャズ音楽の潮流を客たちに紹介すると同時に、アメリカの一種の疑似体験を提供していたといえる（モラスキー、『ジャズ喫茶論』、筑摩書房、2010年を参照）。ところが、地方都市のジャズ現場はさらに東京を彷彿させる都会的文化空間を提供することによって、さらに国内の「ジャズ本場」の疑似体験を提供していたように思われる。岩手県大槌町や釜石市にせよ、長崎県の佐世保にせよ、愛媛県の今治市にせよ、本研究の国内現地調査で明らかになったことは、地方のジャズスポットを鼻根にする多くの常連客は、ジャズ音楽のファンというよりも、居心地良い「居場所」、そして広い世界を垣間見せてくれる文化空間を求めていたことが明らかになった。また、店主達もその欲望を十分に意識しており、写真展や演劇や映画上映会など、音楽以外のイベントを含め多様な文化的催し物を常連客達と一緒に計画し実行していた。東京ではそのようなイベントはすでに専門の施設で開催されていたが、とりわけ辺境の小さな町であればあるほど、一軒の喫茶店だけでも

地元の文化活性化に対しきわめて大きな役割を果たし、大きな比重を占めたという事実が、調査で浮き彫りになった。

(4) 国内の地方都市間にみられるジャズ音楽の文化的存在の差異

上述の米国における各地のジャズ文化の地域差に比べ、本研究の日本国内各地での現地調査から明らかになったのは、東京・横浜および関西の主要都市を除けば、地域差は創出よりも受容の側面において見受けられることである。たとえば、「東北流」や「九州派」といったジャズ演奏のスタイルは生まれていないが、地方都市各地の数少ないジャズスポットでは、店主が好むレコードや東京から呼ぶミュージシャン達のスタイルによって、地元の客たちのジャズ志向が大きく左右されることが、およそインターネット普及の頃までは見られた。とくに辺鄙な小さい町の場合、ジャズを流す店は一軒しかない例が多く、そのため地元のジャズ受容においてひとりの店主の影響が大きかった例は少ない。

(5) 復興とは何か / 役所 vs. 個人店の貢献

本研究を実施するなかで、最も根源的かつ困難な問題は、「復興」および「文化的活性化」をはたしてどのように評価すべきか、という点である。残念ながら、明確な答えが出せずに本研究は終了した。とりわけ本研究課題においてこの問題がなぜ困難なのかというと、国内の中小都市でジャズを復興策として活用する際、最も普及している方法は年に一回行われ

る恒例の「ジャズストリート」やジャズ祭などであることによる。こうしたイベントに関しては、開催期間中の動員客数や、商店街の売り上げとして回収される一時的な利益を把握することはできるものの、経済効果には反映されない側面が多々あり、それらを把握することが難しいのである。また、長期的な効果をどのように計るべきかが悩ましい。やはり、復興効果を考えるためには、「復興とは一体何か」という根源的な問いを考究する必要がある。

本研究の場合、経済的效果よりも町の「長期的文化活性」に焦点を合わせるように努めたが、依然として正確に計る方法はないと思われる。ただし、本研究の国内各地での現地調査の数々の証言から仮説を立てると、復興を目的とする公式のイベントよりも、ジャズ喫茶や音楽カフェなど個人経営の営利的空間のほうが、長期にわたる町の文化的活性に貢献しているようである。もちろん、町興しを目的とするイベントと個人経営の飲食店兼音楽鑑賞空間が相反するものではない。だが、本研究の現地調査から得た数々の証言を分析し集約すると、地道に営業し続けてきたジャズ喫茶やロックカフェなど音楽を提供する飲食店の地元文化への多面的な貢献が過小評価されているように思える。その理由は多岐にわたっており、またそうした貢献の然るべき評価については、今後さらに考究が必要とされるものである。

5. 主な発表論文等 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計 2 件)

マイク・モラスキー、"Music and the Performance of Urban Space in Rural Japan" [「音楽と日本の地方都市における都市空間のパフォーマンス」](European Association for Japanese Studies, リュブリャナ大学(スロベニア)、2014年8月30日)
マイク・モラスキー、(基調講演) "Writing About Japanese Social Space from Inside/Outside" (「内/外から日本の社会空間について書く という行為」)(Association of Anthropologists in Japan, 成城大学、2015年4月26日)

〔図書〕(計 1 件)

東谷護、マイク・モラスキー、ジェームス・ドーシー、永原宣(共著)『日本文化に何を見る? ポピュラーカルチャーとの対話』共和国、2016年3月、202pp.

〔その他〕

〔シンポジウム及び市民講座での招聘講演〕

- (1) 成城大学(2015年1月24日)
- (2) 大阪倶楽部(2015年2月25日)
- (3) 長野市民教育講座(2015年5月8日)
- (4) 一橋大学如水会(2015年10月20日)
- (5) 新潟国際情報大学(2016年3月26日)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

モラスキー マイク (MOLASKY, Michael)
早稲田大学・国際学術院・教授
研究者番号: 80585406

(2) 研究分担者

()
研究者番号:

(3) 連携研究者

()
研究者番号:

